

## 巻頭言

アジア太平洋研究科設立にご尽力され、研究科 20 年の歴史とともに歩み、研究科の発展に多大なご貢献をされた山岡道男先生がいよいよ退職のときを迎えられる。先生は早稲田大学高等学院のご出身で、政治経済学部および大学院経済学研究科で学問を修められた後、1976 年より早稲田大学高等学院で教鞭をとり、その後、1989 年に早稲田大学社会科学研究所に奉職され、以来 30 年にわたり早稲田大学で教育研究に励まれた。半生を捧げて早稲田大学の教育研究に尽くされたと言っても過言ではない。社会科学研究所では、大学院アジア太平洋研究科の設立に参画された。

アジア太平洋研究科は 2018 年に創立 20 周年を迎えたが、先生は籍をおかれた 20 年の間に、研究科に関連するすべての役職、すなわち研究科長、教務主任、専攻主任、副センター長およびアカデミック・アドバイザーを務められた。計 10 年にわたり研究科の運営にかかわられたことは、先生の誇りであり、運営手腕をいかに発揮された。また、大学評議員も 2 期務められている。

私が先生と直接お話しするきっかけとなったのは、大学院国際情報通信研究科に所属していた 4 名の教員がアジア太平洋研究科に移籍したときである。先生は、教務主任および研究科長として、4 名の移籍に関する交渉と調整を続けられた。当時、しばしば先生の研究室を訪問したが、いつも前向きな先生のお言葉に随分と勇気づけられたことをよく覚えている。この件に関しては、最後に想定外の困難があり、多くのご苦勞をおかけすることになってしまったが、このときの恩義は私にとって忘れることはできない。

誰もが認めるとおり、先生はいつも明るく、世話好きで気さくである。おかげで、研究科の雰囲気は随分と和んだのではなかろうか。年下の私にも、よく廊下の向こうから、おーい！と言わんばかりに手を振っていただいた。論文審査などの面倒なことをお願いしても、いつも快く引き受けてくださった。この退職記念号に掲載されている論文の数からも、先生がいかに人望厚く、多くの仲間にも恵まれ、学生に慕われていたかがわかる。

いつも優しい先生であるが、ときどき見せるするどい表情にハッとさせられることもあった。ときに真剣に対峙するその姿勢は、普段のおだやかなお姿とは強いコントラストとなって、受ける者に強いインパクトを与える。学生の指導にも熱心で、学位論文の審査に参加するときには、論文の構成や内容に関するコメントに加えて、文章表現に至るまで細かく修正を入れていただいたことが印象に残っている。

とても几帳面な一面もあり、例えば、ご定年を迎えられる 1 年以上前から研究室の片付けを始められていて、蔵書や資料をきちんと整理されてはご自宅に運ばれる姿をよく拝見した。先生早すぎませんかと申し上げると、今後の研究に必要な資料を残しているのだとおっしゃっていた。その量は膨大であり、収納のために、先生が諏訪の別宅と呼ばれているご実家を改築し、週末には資料を車で運ばれていたようである。本巻頭言を執筆するにあたり、先生からいただいた業績一覧には、1975 年から現在までの論文、著書、学会報告等が 64 ページにわたって記されていた。このような多大な業績のもととなった資料を散逸させずに保管されていることは、後進にとって貴重である。さらに、業績の多さもさ

ることながら、40年以上にわたってそれらをきちんと記録にとどめていることに驚かされた。

研究者としての山岡道男先生は、旺盛な研究活動を永年にわたって継続なさっておられる。先生のご研究は、大別して、経済教育研究と、太平洋問題調査会、朝河貫一およびニュージーランド・オーストラリアを中心としたアジア太平洋地域研究の2つの系統に分類できる。経済教育研究の分野では、経済学の教育メソッドや理解力の把握、経済リテラシーの向上に向けたさまざまな取り組みを長年にわたり、展開された。やさしく経済学を教授することに尽力され、今でも先生のお名前を検索すると、40冊近い経済教育関係の書籍がヒットし、中には経済学を理解するための好書としてずいぶん版を重ねているものもある。「アメリカの高校生が読んでいる」シリーズでは、経済学の教科書を単に基礎的な経済理論を教授するだけでなく、資産運用や投資、企業に至るまで、経済活動を営む上で有用な生きた経済学をわかりやすく解説している。また、行動経済学といった最近注目されている新しい経済学を紹介した書も含まれている。おそらく、経済学が社会科学系の学問の中で最も理解しにくく学生に忌避されがちであることを先生はよくご存じで、その状況を打破したいという思いが、この分野でご貢献される強い動機となったのであろう。また、高等学院で教鞭をとられた経験によって、初学者が陥りやすい点をよく理解されていることも、より実効的な経済学教育を推進する糧となったのではなかろうか。

他方、アジア太平洋地域研究においては、「太平洋問題調査会」に関して先生は30年近くにわたり研究を続けておられる。1989年に社会科学研究所に移籍された際、それまで経済理論を中心に研究をされていた先生が、アジア太平洋地域の歴史に関する発表の必要に迫られて選ばれたテーマが太平洋問題調査会であり、その成果を「太平洋会議に関する研究序説」にまとめ上梓されて以来、ライフワークのひとつとなったという。また、明治28年に早稲田大学の前身である東京専門学校を卒業し、のちに日本人初のYale大学教授となった朝河貫一博士に関する一連の研究は、同研究所において展開されていた朝河貫一研究会の活動に参加したことから始まる。先生は、同研究会の第4代目の会長を務められ、多くの書物を出版されている。

オーストラリア・ニュージーランド研究のきっかけは、1996年4月よりオーストラリア国立大学・豪日研究センターに客員研究員として滞在し、その間、ニュージーランドにおいて太平洋問題調査会関連の資料収集および戦前期に活動したNZ太平洋問題調査会の歴史とその主要メンバーの人物に関する研究を行ったことがきっかけである。計3年にわたり両国で特別研究期間を過ごされ、研究を深められた。さらには、2008年からの4年間および2014年からの4年間には、日本ニュージーランド学会の会長を務められた。

教育においても先生は多くの優秀な学生を育てられ、学窓を巣立った後に、さまざまな分野で活躍している。このように山岡道男先生は学内外にわたり、長年研究および教育の両面において多大な貢献をなされた。アジア太平洋研究科として教職員および関係者一同は、このたびのご退職にあたり、心からの謝意を表したい。

先生が残して下さった教育研究の成果を引き継ぎつつ、さらに時代の変化に対応した研究科を目指して、われわれは研鑽と努力に励む所存です。ご退職され、その笑顔に接する機会が減ることは寂しい限りですが、先生のご健康とご研究のますますのご発展をお祈りするとともに、今後も変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

アジア太平洋研究科長

三友仁志